

らは、ハチたちの営巣場所を覆いつくそうとさえしている。

浜辺の散策を打ち切って、内陸部に広がる、ニセアカシア林に囲まれた砂地へ戻ると、去年まではハナダカバチとクロアナバチのコロニーでにぎわっていた荒地からブルドーザーの走る音が聞こえる。下水処理施設建設のための資材置き場になってしまったのだ。その下水処理施設の建つゆるやかな古砂丘には、ハナゴケのマットが広がり、ハマゴウの幹が地上を走る素敵な砂地があった。もちろん、そこにはコガネグモやナガコガネグモを狩るキオビベッコウが巣をつくり、その巣をめぐるしばしばハチ同士が場外乱闘を繰り返していた。

「虫たちとともにそれを嘆く」とは、猪名川原のハチ観察地が砂利採取で失われたときの岩田久二雄の言葉だが、嘆いてばかりもいられない。エヴァンズの名著は、

次のような皮肉な言葉でしめくられている。砂地に営巣するハチは、人間が掘り返したり埋め戻したりした場所好んで巣をつくる。つまり、人間は大地の被覆をはぎとることで、これらのハチに格好の営巣場所を提供し、自分自身にとっての住み心地を悪化させているというわけだ。「終末近くわずかな生き残りの人間が、広大な不毛の地にたたずみ、アナバチを見つめながら、その好奇心のかけらもない眼をもったちっぽけな大地の付属品を妬んでいるという構図を、容易に思い浮かべることができよう。もちろん、いつの日か人間が行動の本質を十分に学びとり、そうした苦境に立たされることがないという可能性も、なきにしもあらずだが」。私としては、人間よりもアナバチの方が生き残るだろうというエヴァンズの予想が当たってくれたらと思わないでもない。

兵庫県におけるルリクワガタ属の分布について (II)

佐藤 邦夫

筆者らは、兵庫県のルリクワガタ属の調査記録を報告したが(佐藤・永幡, 1994), その後新しく判明したことを報告する。

ルリクワガタ *Platycerus delicatulus* Lewis

城崎郡日高町蘇武岳

8 exs. 幼虫採集 1994-X-15

4 ♂♂ 4 ♀♀ 成虫割出 (1 ♀ は黒色)

1995-IX-29

コルリクワガタ *Platycerus acuticollis* Y. Kurosawa

美方郡美方町小長迫?

産卵マーク 1995-X-14

養父郡八鹿町妙見山

1 ♂ 1994-X-18

幼虫採集 1994-X-18

5 ♂♂ 3 ♀♀ 成虫割出

1995-IX-29

前回報告の際、いくつかの産地で幼虫を採集していたが、1994年夏の猛暑で全滅させてしまった。1995年は、

前回の失敗に懲りて定温倉庫へ預けたため、2年続きの猛暑になったが無事成虫にすることができた。

ルリクワガタは兵庫県では非常に少ないようで、筆者はこれまでに波賀町坂ノ谷の狭い地域で3 ♂♂ 2 ♀♀を採集したのみであり、産卵マークですらここ以外では蘇武岳で3個見ただけであった。今回幼虫を採集したのは、立枯木が雪により倒れたと思われる1本の倒木で、残念ながら樹種は不明である。半数程度の幼虫を採集し、残りは成虫を採集をしようと1995年秋に再度調査を試みたが、幼虫の食痕はあるものの成虫はついに発見できなかった。これは、坂ノ谷でも同様で、幼虫の木だと確認して翌年調査をしても、影も形もないという場合がほとんどであった。それほど、成虫になる確率は低いものと思われる。蘇武岳のルリクワガタは、但馬では筆者の知る限り扇ノ山に次ぐ非常に貴重な記録となった。

参考文献

田中正浩(1987) 兵庫県のクワガタムシ, 昆虫と自然22(7):9-14.

佐藤邦夫・永幡嘉之(1994) 兵庫県におけるルリクワガタ属の分布について, IRATSUME18:52-55.